

I-B-17

気管支喘息における漢方薬の使用経験

東京医科大学第3内科

○多田 克，殿塚典彦，植木彬夫，新妻知行，林 徹，伊藤久雄

【目的】喘息は呼吸困難を主要症状とする疾患であり，発作にあたっては環境因子（住居，寝具，気候，ペット，花木，薬物等），身体的因子（アトピー，疲労，過食，運動，月経，不摂生等），心理社会的因子（不安，葛藤，抑うつ，怒り，悲しみ，気の緩み，緊張，笑い等）等，様々な因子が関与する。これに対しては気管支拡張薬，メディエーター遊離抑制剤，去痰剤等を中心としつつ，環境調整や，抗不安薬，抗うつ薬，心理療法，各種鍛練法等を併用することで治療効果はより向上してきた。近年，身体面や心理面の因子に対して漢方薬を併用することも治療に有用であることが実証されつつある。今回，呼吸困難にとらわれることなく，証を決定して漢方治療を行い，証の改善と喘息発作との有効性について検討した。

【対象及び方法】気管支喘息患者5名（アトピー型2名，感染型1名，その他2名）に対し，証に応じて各々，桂枝加芍薬湯と人参湯，柴朴湯，小柴胡湯，当帰芍薬散，半夏厚朴湯による随証的治療を行った。

【結果】全例において証の改善がみられ，4例において喘息発作の改善を見た。

【考察】上記の6方剤は直接的に気管支拡張作用を有するとは考えられず，治療経過上証の改善に伴い喘息の症状が改善傾向を認めたことは，漢方治療による全身状態の改善や，体力の補強，気分の鎮静化等の効果が間接的に喘息の症状改善に寄与したものと考えられる。

【結語】気管支拡張薬等の現代医療を基礎とした治療に，随証治療による全身状態の改善作用が喘息の発作軽減に寄与することが示唆された。